～ 砂 田 賞 ～

渡辺　敦之

略　　歴

昭和45年8月7日生
平成８年３月　福井医科大学医学部卒業
平成８年６月　香川労災病院勤務
平成９年６月　姫路聖マリア病院勤務
平成10年６月　国立病院機構岡山医療センター勤務
平成12年７月　岡山労災病院勤務
平成14年６月　岡山大学医学部附属病院循環器内科医員
平成15年４月　岡山大学大学院医歯学総合研究科入学
平成18年９月　同修了
平成18年10月　福山市民病院循環器科勤務 現在に至る

研 究 論 文 内 容 要 旨

Brugada 症候群は、右側胸部誘導に特徴的な ST 上昇を認め心室細動による突然死をきたす原因不明の症候群である。治療法としては植え込み型除細動器による心室細動発症時の除細動のみが有効である。しかし、症例の中では稀に頻回な心室細動（arrhythmic storm）を呈し、治療に難渋するものが認められる。その際の薬物療法としてはイソプロテレノールが有効との症例報告は散見されるが、系統的なものはなく使用方法についても不明な点が多かった。そこで当院で経験した頻回な心室性不整脈を呈した Brugada 症候群７名における少量イソプロテレノール投与の治療効果および投与前後の心電図指標の検討をおこなった。症例はいずれも男性で平均年齢は 47 歳、全例入院前もしくは入院中に頻回な心室性不整脈を呈していた。全例に少量イソプロテレノールの静注後､持続投与をおこなった。全例で投与直後より心室性不整脈は抑制された。７名中４名は 24 時間投与、残りの３名中２名は 72 時間投与後に不整脈は抑制された。１名は中止直後より心室細動を頻回に認め、イソプロテレノールの投与下にて硫酸キニジンの内服を開始しイソプロテレノールの漸減、中止に成功した。心電図指標は、静注直後に心拍数増加とともに特徴的な ST 上昇は正常化し、持続静注中は心拍数は投与前に戻ったが ST 上昇は抑制されていた。Brugada 症候群における arrhythmic storm に対しては、心拍数の上昇を伴わない程度の少量のイソプロテレノールの投与で治療効果が得られる可能性が示唆された。